

第241回くらしの植物苑観察会 2019年4月27日(土)

桜草の栽培史

水田 大輝(日本大学生物資源学部 専任講師)

毎年、春先になると、何百とある園芸品種が私たちを楽しませてくれる桜草ですが、園芸品種が現れたのは江戸時代(中期以降)になってからです。元々、日本では四国と沖縄を除く全国に野生の桜草が自生しており、日本人にとって身近な植物でした。桜草の記録が残っているのは室町時代中期(文明年間:1469~1487)からで、以降、様々な書物に桜草が登場します。栽培や育種を通して人が桜草とどのように関わり、愛でてきたのか、竹岡(2014)が分類する桜草が扱われた各時代に沿って、園芸品種が登場するまでを紹介していきます。

第1期 室町中期~後期(文明年間~元亀年間:1469~1572)

野生由来の桜草の栽培が始まります。政治、文化の中心だった京都において、将軍や天皇、宮廷貴族など、ごく一部の^{上流階級}が栽培していました。

最古のサクラソウ栽培の記録として、^{じんそんだいそうじょう}尋尊大僧正の日記『^{だいじょういんじしやぞうじき}大乘院寺社雑事記』に文明10年(1478)3月の日記末尾で、「庭前ノ木草花」の箇所に「二月 花櫻 信乃櫻 岩柳(ユキヤナギ) 庭櫻 櫻草」と書かれており、大乘院(1087年に創建された興福寺の門跡寺院)の庭園に桜草が植えられていました。また、天皇に桜草を進上した記録として、公家である山科言国の日記『^{とまくにきょうき}言国卿記』で明応2年(1493)4月3日に「夕方シタメニ退出畢、(中略)晩影番帰参、^{とまくにきょうき}櫻草御用之由間、予庭ノ三本持参、小御所御座ノ間、直ニ持参、即ウヘサセラレ畢」とあり、^{ごつちみかどてんのう}後土御門天皇が桜草を所望されていたので自邸(山科言国)の庭の桜草3本を直ちに持参すると天皇はお庭にこれらを植えさせていらっしやったとの記述があります。その他、山科家に仕えていた大澤久守の日記『^{やましなげらいき}山科家禮記』でも、延徳3年(1491)2月21日に室町幕府第10代将軍である^{あしかがよしき}足利義材(義植)が桜草と九輪草を所望されていたのでこれを進上した旨の記録が残っています。この時代の記録に残る桜草は、野生から採ってきた個体を庭で育てていたもので、人の手によって作り出された(選び出した)園芸品種ではありません。

第2期 室町後期~江戸前期(天正年間~正徳年間:1573~1715)

野生個体由来の栽培の裾野が複合的に拡大した時代です。桜草の扱いが、宮廷貴族はもとより、豪商や文化人、俳人など幅広い社会階層で広まったのと堺(大阪)や伊勢(三重)、江戸(東京)など地域的な広がりによる2つの側面から説明することができます。

この時代の中に、千利休がわび茶を完成させ、織田信長や豊臣秀吉など多くの大名も茶の湯を^{たしな}嗜んでいました。利休と同じく茶の湯の天下三宗匠と呼ばれた堺の豪商・津田宗及の茶会記(茶の湯日記)である『^{てんのうじやかいき}天王寺屋会記』に、茶花として桜草が生けられた最初の記録が残っています。天正12年(1584)3月4日の茶会で、細口の花入に桜草を生け、それを円盆に置いて床に飾っています。また、寛永10年(1633)に松江重頼によって出版された俳諧書『^{えのこしゅう}犬子集』では、伊勢山田にいた^{じょうせい}盛常が題目「春草」で「花は木の根にかへりてや^{はるのくさ}櫻草」と詠んでいます。障壁画など美術品に残る桜草の記録の例としては、狩野光信(永禄8年(1565)~慶長13年(1608))の作とされる「^{きくらぐさ}四季花鳥図」でタンポポの隣に白花の桜草が描かれていたり、尾形光琳が宝永2年(1702)

に制作した「四季草花図」でも淡紅色と白色の桜草が没骨（輪郭線を用いず、直接彩色する）技法で表されています。また、3代将軍・徳川家光の事績を称えるために描かれたと考えられている

「江戸図屏風」(作成年代:寛永期(1624~1644)頃とされる)は、江戸城本丸に近接した場所に、撫子、紫陽花、菊、百合、椿、桜草などが植えられた「御花畑」が見えます(図1)。このように、桜草が俳諧、障壁画にも登場し、茶道(茶花)や華道でも利用され、次第に知られるようになりました。また、戦国時代が終わり天下泰平の世になると上方の桜草が江戸へもたらされ、桜草栽培が江戸でも始まりました。



図1.「江戸図屏風」に描かれた桜草(国立歴史民俗博物館蔵)

「御花畑(畑)」に植えられた珍品の椿の根元に、淡い紅色の花をつけた野生の桜草が複数描かれています。 <国立歴史民俗博物館HPより引用>

第3期 江戸中期(享保年間~天明年間:1716~1789)

桜草の園芸品種化が始まります。寛永6年(1629)、関東郡代の伊那忠治らが洪水防御、新田開発、船運開発などを目的として現在の熊谷市(久下)で荒川の川道を締め切り、熊谷から真南に東京湾へ流れるようにする付け替え大工事を行いました。これにより下流に戸田ヶ原、浮間ヶ原、尾久ヶ原など広大な原野が生まれ、約100年の時を経て桜草が群生し、そこから園芸品種も出現し始めました。

桜草自然集団の最も古い記録として、大和郡山藩の2代目藩主・柳沢信鴻が安永2年(1773)から天明5年(1785)まで江戸で隠居していた間に書いた日記『宴遊日記』において、安永10年(1781)3月17日に、土手の下の野新田(現在の東京都足立区新田)に続く広野に桜草が所々で咲いていた旨の記録が残っています。また、この頃の園芸書には数多くの品種が記載されており、明和・安永年間(1764~80)頃の作とされる『聚芳図説』(作者不詳)では、桜草を100品所持していた記述があります。江戸・染

井の植木屋・伊藤伊兵衛政武が享保18年(1733)に刊行した『地錦抄附録』では、底白や表と裏で色が異なる花など様々な特徴をもつ園芸品種が登場しています(図2)。なお、この頃の桜草品種は、種をまいて得た実生由来の品種と野生株の突然変異を選抜した品種が混在していたようです。



図2.『地錦抄附録』に記載されている各園芸品種とその特徴

「南京小桜」や「藤浦桜草」、「咲分桜草」など複数の桜草品種が図付きで紹介されています。 <国立国会図書館デジタルコレクションより引用>

参考文献:竹岡泰通著(2014)『桜草栽培の歴史』、創英社/三省堂書店

.....

次回予告 第242回くらしの植物苑観察会 2019年5月25日(土)

「おもしろい花と葉っぱの多様性」辻 誠一郎(東京大学名誉教授)

13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要